治療教育学研究　第6輯　1985

遊戯治療を中心とする精神機能訓練における、外的刺激条件の諸問題と「了解」過程を中心とした一事例報告

田　中　　　守*

1. はじめに

センターに来所する児童，生徒との遊戯治療場面を振り返ってみると，それぞれに固有の治療の過程があり，関係の過程といったものが見い出されるのであるが，その中のいくつかはお互いに非常に似かよっており，又，他のあるものはそれらとは全くかけ離れているといった主観的印象を強く抱かされる。なかでも，自閉症児を対象とした遊戯治療の体験においては，他の障害児との治療的体験ではさほど感ずることのなかった数多くの困難性，および問題点が見い出される。更に，これらの問題点のいくつかは，ただ単に治療場面，および対象児の中だけでの問題にとどまらず，広く社会，および人間一般共通の問題として，治療者自らの人間的生き方，在り方の問題としても検討を余儀なくされる場合が多々あるように思われる。

ここでは，こうした社会，人間一般における問題点（現代文明化社会における人間の脆弱化現像－ローレンツ，K.)を念頭に置きながら，自閉症児（なかでも，とりわけ“軽度自閉症児”と診断された児童）との数年にわたる治療教育的関係の過程を，主として問題行動の見られた場面を中心に，精神機能訓練における外的刺激条件の諸問題と治療教育的関係における〈了解〉の基本原理（西島，1971）との関連性のもとに考察する。又，こうした障害児の訓練・治療における問題点を明らかにし，今後の理解と指導の進展に役立てたいと考える。

2. 治療教育の一環としての遊戯治療について

経験主義に立脚した人間学的治療教育においては，その治療的基盤として，いわゆる「治療的関係」といったものがとりあげられなければならないのであるが（西島，1971），これは又同時に「人間学的了解」にもとずく人間相互の関係の持ち方，及び関係の内における在り方の変化過程，及び深化，発展（体験過程 ― ジエンドリン，G.）において考察，検討がなされなければならないことを意味しているものと思われる。

---

*　障害児治療教育センター

さらに又，こうした「治療的関係」の変化過程は人間の生長＝内的経験過程の生成分化(西島, 1980)をめざしたものでもあるが，その実際的実践に当たっての目標は精神機能の強化，育成といった点に，特に重点が置かれるものであると考える。

遊戯治療における遊戯の持つ意味は，西島（「遊戯」の存在論，西島，1972）が述べているように，機能することの喜び (Funktions Lust) としてとり上げられるが，より本質的には，むしろ《出会い》の媒体として，とり上げられなければならないと考える。

3. 症例による考察及び検討

(1) 症例－A　当時12才（男子）

治療歴：８年　　出産状況：安産

乳幼児期の状況：

○「パパ」,「ママ」,「チョウダイ」等，一方的単語が２才半まで出る。

○２才半～３才の頃，テレビを見て火のつくように泣き，テレビのスイッチをパッと切る。「キル，キル，キル」とヒステリックになる。この時から言葉を云わなくなり，次第に話さなくなる。

○３才から保育園に行くが，なじめず，友人と遊べない。戸外を走り回ることが多く，多動性が続く。某精神病院で軽い自閉症と診断される。

インテイク時の様子：（当時6.6才）

○道路などに対する固執性は幾分なくなるが多動性が続く。集団になじめない。甘えが少し出てきた。

○いたずらが激しい。電気のスイッチに興味を持っており，電源，コードをいじったりする。消防署に通じるベルを鳴らしてしまったりする。電柱によじ登り，電球をとって，割ったり，植木鉢を割ったりしてしまう。学校中の廊下を走り回ったり，水道の水を出したままに放っておいたりする。

○カレンダーめくりに興味を持ち，学校から帰ってくると，かなり遠方まで出かけ，他の家でカレンダーをもらってくる。

約８ヶ月間の治療教育経過後：

○いたずらがぱったり止まり，勉強もよくし，先生に賞められることが多くなる。自分から好きなものを，お金を出して買うことができるようになる。学校でわからないことを隣りの友達に尋ねたりするようになり，云われたこと，規則などはきちんと守る。自閉症ということがわからないくらい，皆の中にとけ込んでいる。学校から帰ると妹達を誘って，他の子ども達と普通に遊んでいる。……

…等と家庭及び学校での変化の様子が，母親から報告されている。

(2) 再び問題行動の出現する時期を中心にした ー 治療教育過程の概要

約６年間の治療教育経過後，本児が高等部進学間近になり，突然いたずらが再発しだす。母親の報告によれば，最近，進学の準備もあって，家庭で少しずつ学習に力を入れていたせいか，再び以前のように街燈に石を投げつけ，電球をかたっぱしから割っていくといった行動が見られるようになったという報告があり，それと呼応するかのように，治療教育場面においても急激な変化がうかがわれる

ようになる。

以下はそれ以後，こうした時期（S 54.4～S 57.12）におけるクライエントの治療教育場面での行動，及びセラピストのかかわり方，感じ方といった点を中心に，治療過程を4つの各段階に分け，それぞれの段階について主だった特徴と変化を記し，説明したものである。

表）治療教育場面でのクライエントの主な行動，
及びセラピストの主なかかわり方，感じ方の変化過程

段階	特　　徴	クライエントの主な行動	セラピストの主なかかわり方，感じ方	主な場面(部屋，遊具等)
I	〈クライエント〉 場面(遊び)に対する消極的否定的態度 と 〈セラピスト〉 自主性(自発性)を尊重しようとするかかわり方	○遊びに対し，次第に消極的，受身的な態度が目立ち始め集中する時間も短くなってくる。 ○一人でじっと，黙していたり，考え込んでいたりする時間が多くなり，場面とは関係のない独り言が多くみられるようになる。 ○時計の時刻を繰り返し，気にするようになり，追従的行動が多くなる。	○クライエントのステレオタイプ的な行動，セラピストに対する依存的なかかわり方といった問題点を感じ，クライエントの状況を新たに感じ直そうとする。 ○クライエントの自主性(自発性)を重んじようとし，クライエントの行動を暗に促そうとする動きが交互にうかがわれる。	遊戯室（I，II） ・トランポリン ・野球(バッティング) ・ボール投げ ・スベリ台
II	〈クライエント〉 場面(遊び)からの積極的な逃避的，回避的行動 いたずらへの執着 と 〈セラピスト〉 焦りと苛立ちの感情	○無気力さが目立つようになる。遊び(卓球)に対しても，中途半端な参加の仕方が目立ち，少しやってみるがすぐに止め一人外にとび出して行くことが多くなる。 ○セラピストにあてつけ，からかうようなかかわり方，行動がみられるようになる。 ○特定の電源コンセント，チョーク消しのモーターにやたらにこだわり，叫び，興奮するといった行動が顕著になる。	○クライエントとの交流関係を持ちたいという焦りの気持とクライエントの状況を何としてでも感じとらなければ…といった，行きづまったイラダチの状態 ○クライエントの執拗な問いかけ，かかわりに対し，無関心，無反応を装った態度が増し，否定的な感情を経験するようになる。	集団精神機能訓練室 ・卓球 センター1階通路 ・電動チョーク消し
III	〈クライエント〉 セラピストに対する否定的反応 いたずらの激化 と 〈セラピスト〉 周囲，環境に対する配慮，管視的，追従的動き	○セラピストに対する過敏さが増し，セラピストから逃げ回ったりしながらも執ように電源，モーター，スイッチ等にこだわろうとする。 ○センター建物内をおもしろ半分に逃げ回り，手当り次第器具，機械をいじったり，研究室の中に入り込み，冷蔵庫の中を物色したり，蛍光燈を破壊するといった行動が目立つ。	○クライエントの行動を阻止しようとしたり，積極的に環境の変化を計ろうとする操作的な動きが増す。 ○仕方なく，クライエントに追従し，様子を確かめるといった管視役的な動きになり，為す術もないといった感じ方が強くなる。 ○クライエントとの信頼関係の回復に努めようとする消極的な動きもみられる。	センター建物1.2.3階
IV	〈クライエント〉 感じ，経験しつつあるといった安定した動き と 〈セラピスト〉 クライエントに対する新たな共感とと親しみの感情	○セラピストと共にセンター建物内を幾分儀礼的に巡り歩くといった傾向がみられるようになる。 ○3階の大講義室に入り込み，静かに窓の外をながめたりしながら，時間が来るのを待つようにして，訓練室にもどるといった行動が顕著に増す。 ○セラピストに対する過敏な反応がみられなくなり，落ちついた応答がみられるようになる。	○クライエントの行動について，なるがままに，時の解決してくれるのを待つといった受身的，態度，姿勢が目立ってくる。 ○セラピスト自身の存在的意義についての自問自答的な反省がうかがわれるようになる。 ○クライエントの行動的意味についての洞察過程がみられ，クライエントに対し，新たな積極的関心，共感を覚える。	センター建物3階 大講義室

段階 I　プレイ場面で積極的に動こうとしなくなるクライエント

Ⓐ プレイ場面でのクライエントの行動及び変化

来所するなり，すぐに遊戯室に入り，積極的に「 ー スル！」と云ってトランポリンを跳び始めたりする。時々セラピストに話しかけたり，「ツギハ，　ー スル！」と云って自ら次の遊びに移ったりする。比較的場面に対して積極的で安定した行動が見られる。しかし，次第に同じ一つの遊びに集中するといったことが少なくなり，どこか消極的で受身的な態度が目立ってきだす。ときとして，遊びの最中に一人考え込むようにじっとしていたり，非活動的に何かをつぶやいたり，場面とは全く関係のない独り言を云ったりすることが多くなってくる。セラピストの話しかけ，問いかけに対しても無関心でいたり，あるいは慌てた様子で，「 ー センセイ，　ー スル」と云い，動こうとするが，すぐに又もとの状態にとどまってしまう。次第に一人でじっとしていたり，何かをつぶやいていたりする時間が長くなり，多く繰り返されるようになる。時々，「ツカレテ

ル，キョウハ，ツカレテル」等と静かにつぶやき，セラピストに答えることもある。トランポリンはほとんどしなくなり，別の遊戯室に移ってからは，時計の針の動き（時間）を気にすることが顕著になりだす。スベリ台の上にじっとすわったまま，まるでセラピストの気をそらすかのようにして，「イマ，ナンジ！」「イマ，ナンジナンプン！?」等と執ように，繰り返し尋ねてくる。時間のことが相当気になっているらしく，そのため，かえって行動することができなくなってしまっている状態でもあるように思われた。セラピストからの働きかけに対しても，拒否的，否定的な反応を除けば全くといっていいぐらい追従的で，常にセラピストにやらせよう，動かせようといった全体的な行動型式が目立ってくる。

Ⓑ セラピストのかかわり方，感じ方

クライエントと共にトランポリンをしたり，野球をしたりするといった積極的なかかわりの中にも，次第に，クライエントの行動にステレオタイプ的な傾向を強く感じ始め，セラピストのかかわりに依存的なクライエントの消極性，受け身的かかわり方といった問題点を強く意識しだす。そして，もう一度，クライエントのこうした動き，状況といったものをよく感じとめよう，感じ直そうとする動きが次第に増し，クライエントの自主性（自発性）を重視しようとする動きが中心的になってくる。（こうしたクライエントの自主性を重んじようとするセラピストのかかわり方は，その時においては，ある意味で全く意図的，操作的な感じさえしてきてしまうこともあり，時には全く一貫性を欠いてしまっていることもあった)。治療教育場面でのクライエントの消極性に対し，ちゅうちょを感じるとともに，クライエントの内的状況の確認とクライエントの体験過程の重視といった点に主力をそそごうとする動きではあるが，反面，暗にクライエントの行動をうながそうとするかかわり方としても特徴づけられると思う。

段階Ⅱ　集団精神機能訓練室から逃げ出そうとするクライエント

Ⓐ プレイ場面でのクライエントの行動，及び変化

((段階Ⅰにおけるクライエントの状況及び行動に対して，セラピストの側から新たに卓球という治療教育的場面を提供することになる。それはある意味ではクライエントに対する強引な申し出でもあり，一つの冒険でもあると思われるが，セラピストの側としては何よりも治療的環境条件に対する積極的な配慮のつもりでもあった。治療室も，より広くて，大きな集団精神機能訓練室へと移行する。))

卓球といった場面に対してのセラピストのむしろ積極的とも思われるかかわり方に反して，クライエントは一応参加し，やってはみるものの，すぐにラケット，球をその場に放り出し，突然気が変ったかのようにして訓練室をとび出していくといった行動が目立つようになる。どちらかと云えば拒否的で，否定的なかかわり方がうかがわれる。又，出来るだけ訓練室内においてクライエントとのかかわりを維持し，保持したいといったセラピスト自身の構えと，何とかして訓練室からとび出していこうとするクライエントの要求との間で，押し問答的なやりとりさえうかがわれる。クライエントはこうした場合においても，決して自主的な意味において単独に行動するといったことはなく，いちいちセラピストに承認を求めてくるのが目立ち，セラピストの反応を

確めた上で行動するのが常である。「アッチ　イク　イッテイイ，　ー センセイ　アッチイク　イッテイイ　アッチ　イッチャアーイカン」等と執ように返事を求めてくるのであり，内容如何にかかわらず，セラピストの応答に接したとたんにニコリと安心感，満足感といったものを表情にあらわし，セラピストの気を引きながらも次第に遠ざかり，訓練室を出ていってしまうのである。いわば非常に儀礼的な行動型式として，ただ単にセラピストの応答に接しようとしているのにしかすぎないといった印象でもある。

訓練室をとび出した後，クライエントはセンター建物内を歩き回り，一人こっそりと電源のスイッチをいじったり，コンセントに火花を飛ばし，興奮するといった行動が主にみられるようになる。

Ⓑ セラピストのかかわり方，感じ方

セラピストの状況として，何とかクライエントとの相互交流を持ちたい，何とかしてセラピスト自身の本当の気持に反応して欲しい………等といった動きと，クライエントの状況を何とかして感じとりたいといった，非常に行詰った状態が感じられる。反面，時としてただのクライエントの行動の監視役，あるいは注意人といった錯覚さえ感じられてくるような場合もあり，唖然とし，かえって腹立たしくなってしまうことも度々であった。クライエントに対しても，又治療教育場面に対しても否定的な感じ方が多くみられるようになる。

段階Ⅲ　チョーク消しに対する執ようなこだわりと追いかけっこ

Ⓐ プレイ場面でのクライエントの行動，及び変化

講義室前の廊下にある電動チョーク消しへのクライエントの執着はひにひに強まり，センターに来所するなり，待ちかねたごとく，そのチョーク消しのある場所へと走り急ぐといった傾向が目立つようになる。憑かれたように幾度となく繰り返しコンセントを差したり，抜いたりし，そのたびにモーターがうなり，回転するのをこの上なく楽しいといった様子でながめ，身体を震わせるといった状態でもある。又時として電源にコンセントの先を軽く触れさせ，故意にショートさせることにより火花を散らすといった行動もみられ，きわどい状況に対するクライエントの非常な興味，関心といったものを感じさせられる。

その後，チョーク消しの取りはずしに引きつづき，クライエントはなおもセンター建物内を歩き回る。各部屋を物色し，電源スイッチ等を手当り次第いじり，セラピストが近寄るのをみては，あわてた様子で逃げ回るといった行動を続ける。クライエントはそうした行動に喜びを見い出してでもいるかのように振る舞い，幾分興奮気味ではあるが溌剌とした様子でもある。しかし，まれではあるが，螢光燈を棒で破壊したり，研究室の冷蔵庫から，飲食物を雑作なく取り出し，試食しようとし，セラピストを慌てさせるといった行動もみられる。

こうしたクライエントの活発な行動もやがて，次第に形式化してきだす。ひととおり建物内の各部屋を回り終えた頃になると，セラピストに時間を尋ね，訓練室に静かにもどり，時間に余裕があれば，卓球を少しするといったパターンが目立ってくる。

Ⓑ セラピストのかかわり方，感じ方

クライエントの行動に関する治療教育場面での制限の持つ意味，在り方といった点が曖昧になってくるとともに，クライエントに対してでばかりでなく，周囲の状況に対する配慮，気兼ねといった動きが目立ち始め，クライエントの行動を暗に阻止しようとしたり，積極的に環境の変化を計ろうとする操作的な動きが多くなってくる。一方クライエントに対しては，積極的なかかわりがことごとく破壊されて，もう為す術がないといった感じでもあり，クライエントと治療時間を共にすることにおいて，「なるがままになってくれればいい，……時が解決するのを待とう，……」といった消極的な気持ちの動きに変化していく。仕方なく，クライエントの後に従い，様子を確める管視人といった役割として考えることもでき，又クライエントにとって特別警戒する必要のない，ただのよき隣人として一緒に付合おうといった姿勢でもある。

段階Ⅳ　一人静かに窓の外をながめ，時間の経つのを待つクライエント

Ⓐ　プレイ場面でのクライエントの行動，及び変化

センター建物内を一応物色するかのように歩き回った後，最後に必ず建物3階の広くて静かな講義室に入り込み，しばらく窓の外をながめたりするといった行動が次第に目立ってくる。3階講義室で過ごす時間も，回数を重ねるに従って長くなり，各部屋を物色し歩き回るといった行動もかなり簡略化された型でみられるにしかすぎず，行動も安定化してくる。セラピストに対する過敏な反応，執ような言語的問いかけといったものは，ほとんどみられなくなるとともに，セラピストからの問いかけに対しても，口数こそ少ないが，落ちついた，静かな口調で反応を示し，それまでの切迫し，緊張した関係とはうって変ったものが感じられるようになる。

Ⓑ　セラピストのかかわり方，感じ方

クライエントと共にいて，「私」自身の自由さ，広さ，世界，……等といったものを経験し出し「自己」の自由さを感じ始める。それと同時に，「自分は今一体，この子どもと一緒にいて何をしようとしているのであろうか……」等といった，今までの焦った気持もふと疑問に思われてくる。そして，その時自分が経験しようとしていることについて，自信のなさと不安を感じながらも，しかし，それが現実でもあり，そのことによって，又，反面それまで全く気が付かず，感じてもみなかったこと ― 自分自身といったようなもの ― が新たに感じられてくるのを覚える。『セラピスト』といった自己の感覚・意識とは異った新しい自己感覚としても強く感じられてくる。

こうした感じ方が次第に広がるに従って，それまでわからなかったこと，そして，もしかしたら？……といった程度にしか思ってもみなかった一つの意味 ― クライエントの行動は一体何を意味しているのか，クライエントの行動の意味は？……といった疑問に対する一つの確かな答……が，突然はっきりとした形で，強く感じられてくる。クライエントはまさに，プレイ・セラピィー(play therapy)を，プレイ (play) 自体をサボっているのである。セラピストにとっては信じ難いクライエントの行動でもあり，驚きでもあった。「プレイをサボる……とは？」，「プレイをサボるといった，クライエントとは……？」等といった思いが充満する。しかし，それ以後，このクライエントに対し，より親近感と慈愛の念を感じ，共感的に接することができるようになる。クライ

エントと行動を共にすることにおいて，抵抗を感ずることなく，むしろ積極的，意欲的に「その時間をサボる」ことができた。

以後，クライエントも落ちつきを取り戻し，家庭等においても，問題行動は減少してきたとの母親の報告を受ける。

(3) 母親の態度及び状況

本児の問題行動が幼小期以来再び出現するまで，約6年間ほどの治療教育の経過があるが，本児が上級学校へ進学するに当り，母親の不安，焦りといったものも再び以前になく強まってきたものと思われる。家庭において，それまで控えていた，学習的課題への若干の強制と押しつけを課しているが，母親の話によれば，それはたいしたことでもなく，ちょっとした簡単な程度のことでもある。しかし，本児に対する母親の期待感は強く，自分の子どもに対する教育的，治療的情熱といったものも，（子どもを持つ母親の態度として，ごく自然な傾向でもあると思われる）かなりあったと思われる。自分の子どもに対する躾は全て親の責任でもあるといった，ある意味において，非常に潔癖で，かつ礼義正しく，正義感の強いといった印象を直接受けることさえ稀ではなかった。将来，子どもをなんとかして一人前の社会人になれるよう，育てあげたい，そうしなければならないといった気迫が強く感じられる人でもあったように思われる。

従って，本児の問題行動が発覚し始めた時期においても，母親から，難色を示した反省の顔色さえ浮べながら，いちはやく進んで相談に応じ，事態を検討，反省しようとする態度がみられ，子どもに対しても治療に対しても，非常に積極的で責任感のある態度がうかがわれる。

(4) 考察及び問題点

① クライエントの問題行動について

子どもの将来に対する母親の心配，焦り，期待感，及び現実として，それに対し直面せざるを得なくなったときの母親の側の理想と現実とのズレから来る葛藤，不安といったものがなんらかの意味において，直接的に（有機体的 Level において）子どもにも伝わっていたものと考えられる。子どもを何とかしてやろうとする親の側での気持の動き（⊕の動き）は，行きづまった親の状況として，不安，焦りを伴い，子どもの側に切迫した状況をつくり出し（⊖の要因），その結果として，反社会的な行動様式に向かわせてしまうといったことにも絡がる，一つの大きな要因でもあったと考えられる。親の側では不安，焦りといった気持の動きは，子どもの側においては，応々にして，自己否定的・疎外的感情を高めてしまう結果にもなると思われる。

と同時に，こうした母－子の間での状況は治療教育場面でのセラピストとクライエントとの関係においても，期せずして，同じように展開されていたものと思われる。クライエントとの「治療的関係」に，積極的，意欲的になろうとするセラピストの動き，在り方（⊕の動き）といったものは，それ自体，クライエントにとって過敏にも感じられるものであり，気になるもの（⊖の要因）でもあったと考えられる。治療教育場面（卓球）に対しても積極的にかかわり，集中しようとするセラピストの全体としての動きの傾向は，クライエントにとって，今一つの課題的意味を治療教育場面

そのものに対しても，それとなく押しつけ，印象づける結果にも絡がってしまったのではないかと考えられる。確かに日常習慣化してしまっていると思われた，治療教育場面でのクライエントの行動のひとつひとつは，全く別の，異なった行動様式（いたずら＝反社会的行動）に置き換えられてしまうことによっていとも簡単に打ち破られてしまったとも考えられるのであるが，被治療教育的経験，治療教育年数の豊富なクライエントにとっては，治療場面そのものが日常的行動スケジュール（学習塾，お習字，学校での授業時間，等）の一環として，日課的，課題的な意味において受けとめられていたということも，クライエントの言動からして十分推察できることでもあると思われる。こうした脈絡において，プレイをさぼる ― といったクライエントの行動の意味性を理解することもできるかと思われる。

しかしながら，一方において，クライエントの言動にうかがわれた，自閉児特有の認知，思考パターン（固執化傾向）といった点に注意するとき，クライエントの反社会化的行動への大きな変化，変動は，治療場面においては，何らかの意味において，クライエントの認知，思考パターンの変化，もしくは，そうした変化への，外からの働きかけに対する反動を意味するものとして考えることもできる。しかし，いずれの場合においても，治療場面でのセラピストの動き，かかわりを検討するに当っては，意識下的，有機体的次元において，クライエントは過敏に反応していると考えられ，クライエントのそうした反応は，自己の豊かな内的体験過程を伴った内的反応というよりは，むしろ，内的体験過程の極めて脆弱化し，貧困化した状態における一種の条件反射的な反応でもあると考えられる点が，特に注目されなければならないことでもある。そして，過敏に作動するクライエントの，そうした対人的状況への反射的反応，働きかけといったものは，あらゆる外部的制約，重圧からの離脱を計り，全ての外的規制を拒もうとする動き（西島，1980）として顕著にうかがわれるのであるが，それは又，人間のより本質的な動きの一表現でもあるかと考えられる。クライエントの行動的変化（いたずらといった問題行動＝反社会的行動）を，そうしたより本質的な，人間の動きにおける（クライエントなりの）一実現化への，過程，努力として受けとめることもできる。

② 〈了解〉過程（行動の意味の洞察）について

この症例におけるクライエントの行動の全体的変化について，治療過程を中心に振り返ってみるとき，〈了解〉の全体的，有機体的側面，かつ，その本質的意義といったことについて，再度，検討を迫られる思いが強くしてくるのであるが，それは〈了解〉の基本原則としての主体の側における，Conceptual system の崩壊現象（西島，1969, 1971）についての反省でもあり，「……，そこに生起している個人の経験的（experiencing）世界は，認識主体により客体化されると云う認識過程のみによってでなくて，認識主体の経験的（experiencing）世界に再現象される過程によって明確になるものである……」(西島，1975）といった〈了解〉の認識論的問題に関する考察でもあると考えられる。経験的事実（現象学的事実）を問題とするに当り，こうした認識主体の側での変革過程（conceptual system の崩壊現象）といった点が一つの重要な課題にもなると考えられ，その全身心的，全一的体験過程において，とり上げられうる場合においては，それは又同時に治療的場面としての本来的意味を荷い，《出合い》の状況として，あるいは又，《出合い》の状況に到る一過程としても考察されるものであると考える。

更に又，こうした認識主体における〈Conceptual systemの崩壊現象〉という現象は，個人の世界における態度，在り方，生き方……等と深く関連した事実でもあると考えられ，個人純粋化の過程として，いわゆる〈ありのままの自己(Rogers. C.R.)〉として，自己の体験過程に開かれた個人の在り方といったものを，一面において強く意味しているとも考えることができる。セラピスト自身，クライエントとの治療教育的関係において，自己の内的体験過程を謙虚に振りかえるとき，〈ありのままでの自由な体験過程〉への指向性といったものが，本症例を中心とした治療教育過程，あるいはクライエント自らの体験過程において，暗に示唆されていたように感じられてくる。

③ 治療場面から離れるといった行動について

一定の期間治療教育を経験し，その間，治療教育場面においても，それなりの治療的過程の進展が認められ，家庭等の日常的行動においても，かなりの変化，生長ぶりについての報告が母親から聞かされる反面，それ以後の治療教育の過程において，突如として，あるいは次第に，治療教育場面（遊戯治療室，精神機能訓練室）から離れ，単なる行動範囲の広がりとしてばかりでなく，治療教育場面そのものから遠ざかるといったクライエントの行動的傾向が，本症例においてばかりでなく，他の症例においても著しく認められるのであるが，こうしたクライエントの行動を，どのように受けとめ，考察していったらよいのかといった問題が考えられる。それは，具体的には以下のような点において考察されるものと考える。

Ⓐ 積極的な意味において

1）年令的発達変化に応じた，治療教育環境への配慮

2）治療教育場面（治療関係）の検討，及び改善

3）治療教育過程におけるクライエントの内的変化（成長）過程の様態として

Ⓑ 消極的な意味において

1）治療教育場面に対するクライエントの否定的反応（変化，出来事に対する過敏性）の様態として

2）クライエント自身の内的否定的状況の反映化（逃避，及び回避の機制と安定性の回復）として

しかしながら，実際の治療教育に当っては，クライエントの内的状況の変化，特に治療教育場面以外での日常生活場面における，クライエントの状況の与える影響性について，注目し，考慮せずにはいられない場合も多く，社会化，集団化の過程での2次的障害としての問題性も強く指摘され，インテグレーションの在り方に関する問題としても深く検討されなければならないものでもあると考えられる。

④ 軽度自閉症児に共通した特質ある動きについて

本症例を含めた数名の軽度自閉症児（10才～16才，有言語）を中心とする治療教育的体験を通じて，幾つかの目立った特質ある動きが見い出される。非常に限られた，個人的治療体験の中からではあるが，そうした特質的な動きの幾つかの特徴を，今後の検討，考察に役立つよう，取り出し，整理してみることにする。

A）間をとる。距離を常に保とうとする動き。回避と接近が同時的に感じられ，どちらなのか区別がつきにくい行動及び動き。

B）自分にとって意味があると思われるような人物に対する過敏な反応，及び見知らぬ人物，他者に対する無関心，傍若無人的態度，振る舞い等といった，一見相反するような動きと儀礼的かかわりの反応。

C）自分自身，及び自分のことに触れられることを極端に嫌い，常に相手（外＝他者の動き）が気になっている。

D）負けず嫌いで，相手に先を越されたくないといった，無意味で過度な動き（競争心），及び自己否定的な動きに対する過敏性。

E）過敏性（警戒心）と無関心（大胆さ，図々しさ）とが表裏一体をなした動き。

F）外からの制限（枠）に対する過敏さ（拒否）と自己の枠の固執，保持，防衛。

G）自己責任性（フランクル，V），苦悩といった人間の態度的（＝倫理的）在り方とは全く正反対の生き方……といった強い印象。

こうした特質ある動きのひとつひとつといったものは，それぞれ，その時の子どもの状態，状況に応じて一人一人皆違っており，その程度も変化していると思われるが，治療過程全体を振り返ってみるとき，そこに，ある程度共通して見い出される事柄でもあると思われる。又こうした事柄は精神機能訓練の技法に関する基礎的考察（西島，1980）との関連において，取り上げられ，検討されなければならないものでもあると考えられる。この場合特に注目し，強調したいと思う第1点は，症例A）においても顕著にうかがわれたごとく，自分のことに触れられるのを嫌うといった動きの特質についてである。

他者との直接的な関係及びかかわりの場において，「自己に触れる（＝出会う）」といった，いわば自己の直接的経験過程に触れようとする出来事は，こうした子どもにとって，かなりの動揺，不安をも暗に意味するものでもあると考えられ，他者からの眼差し＝他人から自分がどう見られ，どう思われようとしているのか……等といった，いわば自己の外が圧倒的に問題となっている状態でもあると考えられる。更に又，こうした自己の状況に対する他者（＝外）からの働きかけ，かかわりといったものは，通常の意味における積極的，治療的努力にもかかわらず，応々にして，ただ単なる不安，焦りといった否定的感情を相互に増々高め合い，募らせてしまうといった結果にも絡がる，単なる否定的要因としての意味を有するだけのことに終ってしまうということも充分考えられる。特に子どもの側において，人間的状況としての虚弱化傾向が多分にうかがわれるような場合，指導者（治療者）の側での，子どもに対する積極的関心，注意，眼差し，気配等といったもの自体もうすでに子供の側においては，応々にして否定的要因として感じとられうるものでもあるといった点に，特に配慮する必要があると思われる。しかしながら，こうした対象児とのかかわりにおける問題は，又，指導者（治療者）自身の，他者との関係における「自己自身の在り方」の問題としても深く反省し，検討されなければならない事柄でもあると考えられる。

更に，注目したいと思われる第2点としてこうした「触れられたくない」といった動きは，又単なる一方的な関係の拒絶（否定）としてのみ考え，受けとることはできず，むしろ，子どもにおいては，他者への積極的なかかわりの行動さえ，多分に認められるものでもあり，他者との関係に対する積極的で意欲的な関心の強くあることを示しているといった点である。他者との関係に対する

執ようなこだわり，執着といった行動において，こうした傾向が著しくみうけられる。即ち，対象児の内的状況においては，他者に対する積極的で意欲的な関心（肯定的，接近の動き）と触れられたくない，近かづいて欲しくないといった動き（否定的，回避の動き）がほぼ等しく，あるいは同時的に反応し合っているとも考えられる。特に外的刺激に対してばかりでなく，自己の内的刺激に対しても過敏な状態，状況においては，行動面においても，こうした相矛質した傾向が著しく観察されることもあり，他者とのかかわり，コミュニケーションといった点において，まさに2重拘束（ベイトソン・G.）的な状況が目立って強く感じられてくるのであるが，こうした対象児の行動及び反応は，「世界との接触があまりにも身近かすぎ，その接触が脅威的な世界の肉薄となるため，世界からより大きな距離をとる」（ビンスワンガー，L.）といった自閉性についての現象学的記述によって，より明確な理解と共感が得られるものでもあると考える。

4. おわりに

一軽度自閉症児との治療教育の過程において，了解現象が如何に生じ，又それがクライエントとの治療教育的関係にどのような影響（意味）をもつものであるのかといった，〈了解〉の在り方，及びその治療教育的意義といった点について，事例に即し，検討し，〈出会い〉としての治療的意味，〈ありのままの自己〉といった治療教育過程における指向的様態が見い出された。又，あわせて自閉症児との治療的関係における外的刺激条件としてのセラピストのかかわり，働きかけにおける問題点も指摘され，過敏な対象児との関係の内におけるセラピスト自身の「自己の在り方」の問題としても検討されなければならないことが見い出された。特に自閉症児特有の動きについて，「触れ合いを拒む」といった特質があるようにも考えられ，そうした動きの特質と自閉性についての現象学的な記述との関連性についても若干考察を進めた。更に，他方においては，治療教育の実践化を進めていく上での，治療場面以外での環境的，社会的要因にも触れ，2次的障害との関連における対象児の集団化，社会化といった，いわゆるインテグレーションの問題としても考察され，特に母ー子相互の関係を中心とした問題点との関連性においても，その在り方，進め方といった点が問題として検討されなければならないといったことが指摘された。

なお，今回は主として，症例A）のみを取り上げ考察を進めたが，今後は他の症例についても同様に検討し，特に「Being-therapy（存在論的，治療教育学的心理療法）」（西島，1980）との関連性についても考察を進め，治療教育のより一層の理解と明確化を計り，指導，実践に役立てたいと考える。

参考及び引用文献

① Axline, V.M.　遊戯療法　小林訳　岩崎学術出版　1974

② 遠藤勉　カウンセリングと人間尊重　大阪心理出版　1982

③ Weiner, M.F.　人間としての心理治療者　有斐閣選書R　佐治他訳　1983

④ 荻野恒一　状況の精神病理　弘文堂　1978

⑤ Carkhuff, R.R.　心のふれ合いとカウンセリング　J.M. リベラ他監訳　岩崎学術出版　1973

⑥ Gendline, E.J. Existentialism and Experiential Psychotherapy The Child's Discovery of Himself edited by Clark Moustakas. Jason Aranson Inc. 1973

⑦ Gendline, E.J.　体験過程と心理療法　村瀬訳　牧書店　1966

⑧ Gendline, E.J.　分裂病者との経験交流にみられるクライアント中心療法の発展の傾向　人は人によりてのみ　P.171 － P.185　柘植他訳　明治図書　1974

⑨ 精神医学事典　加藤他編　弘文堂　1975

⑩ Tinbergen, E.A./Tinbergen, N.　自閉症　文明社会への動物行動学的アプローチ　新書館　1976

⑪ 知能障害事典　内山監修　岩崎学術出版　1979

⑫ 西島義雄　精神薄弱児の心理療法　精神薄弱児研究　日本文化科学者　1970

⑬ 西島義雄　障害児治療教育学原論（序説1）愛知教育大学研究報告　第20輯　1971

⑭ 西島義雄　治療教育学原論（序説補遺）　愛知教育大学障害児治療教育研究室紀要（Ⅲ）1972

⑮ 西島義雄　北欧の精神薄弱教育とその基礎　インテグレーションの諸問題と職業の意味　精神薄弱児研究　1975

⑯ 西島義雄　治療教育学原論（序説Ⅲ）治療教育学研究　第1輯　愛知教育大学障害児治療教育センター　1976

⑰ 西島義雄　治療教育学原論（序説Ⅳ）治療教育学研究　第2輯　愛知教育大学障害児治療教育センター　1980

⑱ 西谷三四郎　心身障害の医学　心身障害の医学と心理学　第1部　図書文化　1978

⑲ Frankl, V.　苦悩の存在論　真行寺訳　新泉社　1972

⑳ Buber, M.　弧独と愛　野口訳　創文社　1968

㉑ Bateson, G. 認識論の病理　里麻訳　現代思想　1984

㉒ Moustakas, C.　児童の心理療法　古屋訳編　岩崎学術出版　1968

㉓ Rogers, C.R.　カウンセラーの条件とクライエントの過程　ロージァズ全集　第4巻　伊東編訳　岩崎学術出版　1968

㉔ Rogers, C.R.　分裂病者の人たちとの心理療法から学び得たことども　人は人によりてのみ　P.259 － P.273　柘植他訳　明治図書　1974

㉕ Rogers, C.R.　マルチン・ブーバーとカール・ロージァズとの対話　ロージァズ全集　第12巻　第6章　村山編訳　岩崎学術出版　1971

㉖ Lorenz, K.　文明化した人間の八つの大罪　日高訳　思索社　1973

㉗ Lorenz, K.　自然界と人間の運命　Ⅰ，Ⅱ　谷口訳　思索社　1983

㉘ Lorenz, K.　人間性の解体　谷口訳　思索社　1985

㉙ Ward, A.J. Childhood Autism & Structual Therapy Nelson-Hall, Chicago, 1976